

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

裏切られし令嬢
葉月



大杉和馬

表紙イラスト／ひかにゃん

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された『裏切られし令嬢 葉月』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



裏切られ令嬢
葉月

大杉和馬

表紙イラスト／ひかにゃん

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

み どう は づ き
御堂葉月

聖宝女学院で全学年の女生徒たちから慕われるお姉様。同様に人気を集める学内の天才少女・四乃倉麗美を親友として慕っている。

「おはようございます」

「おはようございます」

涼やかな朝の空気の中、あちらこちらから元気の良い、しかしそれでいて何処か気品漂う朝の挨拶が響く。

白も鮮やか、見るからに高級品と判る制服で統一された女子の集団が、その声の発生元だった。

「おい、見ろよ。聖宝女学院の子達だぜ」

「ああ、何て言うか、何時見ても俺達とは住む世界が違うって感じだよなあ……」

一定の方向へ向かう女生徒を眺め、別の学園の生徒達や通勤途中のサラリーマンなどが憧憬の眼差しで見つめている。

確かに、女生徒達の話し方、歩き方や立ち居振る舞いに至るまで全員が楚々としており、気品さえ感じさせる集団だった。

聖宝女学院。俗に言うお嬢様学院であり、財閥や華族の子女が集められたこの有名な私立学園は、将来は社交界の中心となる様な淑女レディの教育を学園の基本方針として掲げている全寮制の学園だ。

その為、学問は勿論の事、立ち居振る舞いや話し方に至るまで徹底した教育と指導が定められ、そこに通う生徒達は家庭環境による厳しい躰と学園の厳格な校風も相まって、名

前だけではないお嬢様学校としてその名を轟かせていた。

「あ……」

ザワ……ッ!!

けれど、そんな彼女達の中にも別格と言う者は存在した。

「葉月様……」

「ああ、葉月お姉様だわ……」

ほう、と誰かが感嘆のため息をつくのが聞こえる。

女子生徒の集団が、まるであらかじめ決められていたかの様に一斉に足を止めていく。そしてその中心を颯爽と歩く人影があった。

御堂葉月……。それがその人物の名だった。

背の高さは百七十に届くぐらいだろうか。女性としてはかなり長身な部類に入る。すらりと長く伸びた手足は、肢体のバランスを美しく保ち、母性をひと際感じさせるふくよかな胸の膨らみは美しい稜線を描いて、その形と大きさの調和も完璧だ。

真っ直ぐな背筋と迷いなく前を見つめる強い視線。その堂々とした歩き姿は、まるでモデルのウォーキングを見ているかのようだった。

その面立ちもまた、皆の視線を惹きつけている要因の一つだった。宝石の様に輝く瞳は強い意志を宿しながら、その穏やかな目元は人を安心させ、小振りな唇は朱も引いていな

いにもかかわらず、鮮やかな桜色に輝いている。

目鼻の筋はスラリと美しく、頬から顎にかけてラインも極めて優美、シミ一つない肌の白さは目にも鮮やかだ。背の半ばまで伸びた癖一つない髪は、優しげな茶色ブラウンで、朝の陽光を映して輝いている。個々のパーツの美しさも、全体の調和の素晴らしさも、完璧と言って良い程に完成された美貌だった。

「ああ、やっぱり素敵……」

「何時見ても絵になるわ……」

次々とため息が漏れ、熱の籠った視線を向けられる

彼女はただ通学路を歩いているだけだと言うのに、自然と目が吸い寄せられていった。まるで彼女自身が輝きを放っているかの様な眩しさを感じ、涼やかな風が薙いでいくかの様な錯覚を、その場のほぼ全員が受けていた。

「相変わらずですのね……」

そんな完璧過ぎるが故に何処か孤高さを感じる彼女に声をかける人物が居た。

「麗美……おはよう!!」

葉月と呼ばれた美少女の表情が、その人物を見た途端、嬉しそうにパッと輝く。まるでその笑顔が周囲を照らし出したかの様に辺りが明るくなった気がした。

「ええ、おはよう、葉月……」

葉月の前に立つ少女もまたとんでもない美貌の持ち主だった。

煌めく黒曜石の様な大きな瞳、色白の容姿の中で、鮮やかな朱色の唇が目を惹く。長く伸びた漆黒の髪は、星々をちりばめた夜空の様に美しき輝き、女性としては長身の少女よりもやや背は高い。

だが彼女の美しさは奇妙な冷たさを感じる。瞳は冷ややかな輝きを放ち、口元に浮かべた笑みも何処か人を見下していた。

四乃倉麗美。四乃倉財閥の一人娘であり、美貌、スタイル、学力からスポーツに至るまでトップクラスの天才少女と謳われていた。ただその性格は冷徹で知られ、自分以外の他者を見下すその性格の悪さから周囲には敬遠されていた。

それでも同年代に彼女と言う存在が居なければ、もう少しその性格が真つ当であつたならば、葉月と人気を二分していてもおかしくない程の美少女だった。

「ふふ、それにしても、本当に相変わらぬの人気ですね。葉月は」

「はあ、麗美まで、やめてよ……そう言うの、苦手なのは知っていますでしょう？」

クスクスと笑いながら親友に語りかける彼女の瞳に、何か暗い感情が渦巻いているのを彼女は気付いていない。

いや、心中察している部分もあるのかもしれないが、それを上回る彼女への信頼が、本来、聡明な彼女の洞察眼を曇らせていた。

「ははっ!! まあ、そう言っただけじゃなくて。貴方を彼女達、まるでアイドルか、いや、女神様でも信奉している様じゃない……」

「はあ、だからそれが嫌なのよ……」

葉月とて下級生や同級生、それどころか上級生や教師達までが自分を特別な目で見ている事に気付かないわけではない。だが、そんな目を向けられる事を、彼女自身はまるで望んでいない。

尊敬してくれている事も、褒められている事も勿論嬉しい。だが、自分が特別だなどとも思っていないし、何より友人達には同等のつき合いを望んでいる。

「ふう〜」

だからこそ自分と彼女達の間にある距離を悲しく思い、自分に遠慮なく近づいてきてくれる麗美を嬉しく思うのだ。

「……」

だが、そんな彼女の憂い顔を見つめる友人の瞳はやはり、何処か冷たかった。

「オラオラ……そんなツレナイ態度とる事ねえじゃねえかよお」

「まったくだぜ。聖宝のお嬢様は、俺達みたいなチンピラとは、顔を見て話す事も出来ねえってのかねえ」

「ヒツ……、そ、そんな……」

ギヤハハハ。怯える少女を見つめて、彼女を取り囲む男達が品の悪い笑い声を上げる。ここは聖宝女学院の通学路近くの繁華街にある路地裏。

学園からの帰宅途中に立ち寄ったそこで、この男達に絡まれた少女が完全に怯え切っていた。見るからに箱入りと言うこの女の子に、この様な男達とこれまで関わってきた経験はない。

「お、お願いです。許してください……お家に帰して……」

この様な寄り道などするんじゃないやなかつた。真っ直ぐ家に帰ればよかつた。

後悔が少女の頭の中をいっぱいに占め、自分がいったいどうなるのか暗い想像ばかりが頭に浮かぶ。

「おいおい、そんなに怯えるなよ。俺達傷付いちやうじゃないかよ」

「ほんと、俺らこんな怖い顔してるけど紳士なんだぜえ」

「そうそう、優しく気持ち良い事してやるからよお」

ゲヒヤヒヤ……。一片の信頼さえ抱けない様な下卑た笑いを浮かべながら、男達は大勢で少女を囲む。

このまま時が経てば、男達の薄汚れた欲望が世間知らずな少女の身に襲い掛かるのは明白だった。

「待ちなさいっ!!」

だが、そんな暴虐の輩の牙が少女に届く前に、凜と響く制止の声か、暗い路地裏に響き渡った。

「ああん!？」

「なんだあ!？」

せつかくのお楽しみを邪魔された男達が、不機嫌そうに声のした方を振り返り、声もなく硬直した。

「お、おいこりやあ……」

「すっげえ……美人……」

そこに立っている美しい令嬢の姿を見て、男達はおろか少女さえも息を呑んだ。男達が囲む少女も十分に美少女と言って良い分類の造形をしているが、彼女のそれは格が違った。いや、容姿という面だけ見れば、そこまで少女と葉月に極端な差はないだろう。だが、その内側から滲み出る自信と威風が、その身を輝かんに覆うカリスマ性が、彼女をただの少女とは違う存在へと押し上げる。

「ただの一人の少女を大勢で囲むなんて、貴方達は恥ずかしくないのですか？ 恥を知りなさい!!」

大喝しながら路地裏へと歩を進める葉月の姿に、思わずならず者達は素直に道を開けて

しまう。道理も、法も、秩序や情理さえ弁えない無法者達が、ただ一人の少女が放つ気高い意思の輝きに吞まれて道を譲った。

「大丈夫？ 怪我はないかしら？」

「……………あ……………」

優しい葉月の声に、恐怖のあまり焦点を失っていた少女の瞳に小さな光が灯る。絶望しかなかった無力な令嬢は差し伸べられた救いの手に気付くのに数秒の時間を必要とした。返事も出来ずにただただコクコクと頷くだけの少女の頬に手を当て、ソツとその涙を拭つてあげる。

「もう大丈夫よ……………。怖かったでしょう？ もう安心よ」

まだ周囲は男達に囲まれたまま、危機は去っていない。けれど、少女を安心させるように笑う葉月の慈愛に満ちた微笑みを、少女はボウツとなった面持ちで見上げている。

「お、おおい美人の姉ちゃん。随分と大きく出てくれるじゃねえか」

「そうそう、何が安心なんだよ？ それとも何か？ あんたがソイツの代わりに俺達の相手をしてくれるってか？」

「お？ そりゃいいや。そう言う話だったら俺達は大歓迎だぜえ」

葉月に気圧される形になっていた男達も、調子を取り戻したのか、次々に下卑た笑いと下劣な言葉をかけて来た。

それどころか、せつかくネギを背負ったカモが自分の方からやって来たのだ。逃がしてはなるものかと気の強いお嬢様と少女を取り囲む。

「……どうか道を開けてくれませんか？ 私達は貴方がたの相手をするつもりも、その時間もないんです」

少女に向けていた瞳が振り向くと同時に、視線は氷の槍を思わせる冷たい鋭さと苛烈さを宿して、不良達へと叩きつけられる。けれどその瞳に宿るのは憎悪や侮蔑と言った悪感情などはなく、悪しきを正し、正義を貫かんとする清冽なる煌めきだけがあった。

「おう怖い。怖い。そんな怖い目しないでくれよお」

「そうだぜえ。もっと色っぽい目で見つめてくれたら最高だな」

内心、背が高いとはいえただの少女に威圧されてしまいそうになる自分に腹を立てながらも、男達は軽薄な態度を崩さず、囲みを解こうともしない。

そんな男達を見つめる葉月の視線が険しさを増し、やがて無言で怯える少女の手を掴むとそのまま大通りへと向かおうとする。

「おいおい、姉ちゃん。俺達を無視するなよ」

そんな彼女の態度に苛立った男の一人が、立ち去ろうとする葉月の手首を乱暴に掴んだ。いくら気が強くても所詮は女。力でどうとでもなると思っただろう。

「え……？」

「なっ!!」

胸に抱えたままの獲物をニヤニヤと見下ろしながら告げる男の言葉に、葉月が絶句する。
「そ、そんな……き、キスなんて……」

「おやおや? ひよつとして葉月お嬢様はキスも初めてだったのかなあ?」
「うっ、くっ……それは……」

凶星を突かれた少女が、言葉を続けられずに俯く。世間知らずと言うわけではないが、財閥の令嬢として育てられた彼女には、これまで財産目当てのボンボンや容姿だけに気を惹かれた軽い男達しか傍には寄ってこなかった。

当然、その様な男達に心を開くわけはなく。ファーストキスはおろか初恋さえもこの潔癖な処女には経験がない。

「あはは、こりやいいや。おおかた処女だろうとは思ってたが、まさかキスさえした事ないのかよ? 本当に呆れたお嬢様ぶりだな!!」

「くっ、だ、黙ってくださいいっ!!」

ゲラゲラとリーダーと男達の笑い声を、羞恥と屈辱に頬を染めたお嬢様の叫びが遮る。脅迫や罵倒ならば軽く流せる葉月であったが、こう言った方面に免疫のない彼女は性的な方向での侮辱に弱かった。

「くくくく……黙らせたいなら、その唇で塞いだらどうだ? ほれ……」

「ううっ……そ、そんな……そんなはしたない事……私が……自分でなんて……」

葉月にとって自分から心を許していない相手に唇を捧げるなど、耐えがたい屈辱だった。ただでさえ良家の子女として育てられた彼女の潔癖性は極めて強い。

だがそれでも、葉月にとって友人を見捨てるという選択は、己の純潔や命を引き替えにしたとしても選べる選択肢ではなかった。

「わ、判りました。き、キスを……すれば……いいのでしょうか？」

羞恥に顔を真っ赤にしながら顔を上げると、睨むようにして卑怯な男を見据えたまま、顔を近づけていく。

「ンっ……くう……うう……」

唇が触れ合うと同時に、葉月の身体が小さく震える。小刻みに震えるその身体が、どれだけ気丈であっても、耐えがたい屈辱と初めての口づけの思い出を汚された悲しみを消せない事を物語っている。

「くふふふ、さすがに良家のお嬢様の……んんっ……唇は違うぜ……ちゅっ……ほおら、もつと……んくっ、味わえよ……」

「い、いや……ちゅ……はあ……そ、そんな……んむっちゅ……んんっ……」

そのまますぐに離れようとする葉月の後頭部に手を回し、逃がさない様に固定してからリーダーは初心な少女の柔らかい唇の感触を堪能する。

ちゆくちゆく……ちゆる……ぴちや……。

粘膜同士が触れ合う濡れた音と唾液を吸る淫卑な音が、埃っぽい廃工場の跡地に木霊する。苦しげなお嬢様の喘ぎ声と、周りから囁きたてる男達の歓声が酷く対照的で、それが一層、淫猥な空気を醸し出していた。

「はあ……はっ……はっ……はっ……はっ……」

「くくくく、良かったぜえ、お前の唇の味……。どうだいお前さんにとってのファーストキスの味は？ レモンの味でもしたか？」

「はっ、はっ、くっ、くっ、誰が……こんなの最悪です……っ!!」

ヤニ臭い唇と不潔な歯、生臭い吐息の相手とのキスは葉月にとつて最悪の感触と臭い、思い出しに残さなかった。口の中には何を食べたらこんな口臭がするのかと思うほどの臭いとおぞましい唾液の味の残滓が残っている。

「そいつは悪かったなあ。せつかくのファーストキスの思い出だったのによお……」

「はあ、うっ、くう……よ、余計なお世話です……はあ……」

「まあ、そう言うなよ……」

「ううんんっ!!」

まだ肩で息をしている美少女の唇に、再び男の唇が重ねられる。やはり隠しきれないシヨックを受けていた葉月は不意を突かれて、それをかわす事が出来ない。

「うむうつ!! ま、またっ!! ふっ、ちゅっ、はっ、うううんっ!!」

だが今度は口づけだけではなかった。何時の間に口に含んでいたのか、得体の知れない液体が葉月の口内へと流し込まれてくる。

「い、いやっ!! な、何をっ?! うむっ、ちゅっ、はあっ」

何とか飲み干さない様に抵抗しようとするが、ガツチリと拘束された身体を引き剥がす事が出来ない。手錠で拘束された両手を相手の胸に押し当て、身体を引き剥がそうとするが、ガチャガチャと金属音が奏でられるだけだ。

喉を強く焼く刺激、鼻を衝くアルコール臭にようやくそれが酒だと気付いたのは、半分以上吞まされた後だった。

「ぐっ、げほっ、ケホッ、な、何を……!!」

「くくく、せつかくだから酒を御馳走してやろうと思っとな? どうだ良い酒だろ?」

「そ、そんな……お酒を飲ませるなんて……はあ……うつ……」

父や親戚の主催するパーティに出席し、ワインくらいは軽く嗜んだ事のある葉月だが、男が吞ませた酒はそれらよりはるかに度数の強い酒だった。呑んだ量自体は大した事が無いものの、その強いアルコールが酒気に慣れていない葉月を翻弄する。

「ほおら、もつと吞めよ!!」

「い、いやっ!! も、もうこれ以上は!! んんんっ!! ちゅっ、むううつ、やあつ、喉が

焼ける……んんっ!!」

男は更に勢いよく酒をあおり、口移しで葉月の胃に酒を流し込む。胃がカッと熱くなり、全身の血流が勢いを増した。

「はあ……はあ……くう……身体が熱い……」

身体が熱を持ち、軽い酩酊状態が葉月の気を大きくする。怒りや屈辱が薄まり、フワフワとした心地良い浮遊感が全身を覆った。

「くくく、いい気分だろ？」

「んっ、ああっ、いやっ……触らないで……はあ……んんっ……」

酒気が程良く回り始めた事を確認し、葉月の形良い胸の膨らみを、男は大きな掌で捏ね回す。大き過ぎず、かと言って小さ過ぎない美しいお椀型の双丘は男の下卑た悦びを搔きたてる。

掌に収まり切らないサイズの膨らみは、雪の様に白い聖宝の制服を内側から押し上げ、掴んだ指が沈み込む様な柔らかさと同時にその指を押し返す程良い弾力を有している。

「へへへへ、最高のオッパイだけ。さすが聖宝のお嬢様のオッパイはひと味もふた味も違うなあ」

「くう……下品な事を……はあ……言わないでください……あうっ、そんなに強く胸を……あつ、くっ……」

あまりに心地良い揉み心地に夢中になった男の握力が力を増し、葉月が苦悶に顔を歪める。だがこんな男達に女性を労るなどと言う思考はない。ただひたすら己の欲望を満たす為に少女の胸の感触を堪能し続ける。

「そんな事言ったってよお。こんなエロイオッパイ目の前にぶら下げられたら、こっちはたまんねえぜ。お前だって本当は揉んで欲しいんだろ？」

「だ、誰がっ!! くうっ、痛っ、あつ、その手を……はあ、離して……っ」

耳元で囁かれる屈辱の言葉に顔を背け、相手の身体を引き剥がそうと暴れる。だが麗美に突きつけられたナイフを見ると、どうしてもその動きが鈍ってしまうのだった。

「まったく友達思いのお嬢様だぜ。友人を助ける為に俺達に、その美味しそうな身体を御馳走してくれるってんだからよオ」

「まったくくだ。慈悲深いお嬢様だぜ」

下卑た笑いが廃工場内に響き、葉月は屈辱に歯噛みする。

「んっ、ふっ、はあ、んんっ、やめ……くう……っ!!」

しかし、ひたすら男の手で揉み解される双乳は、やがて熱を持ち、苦痛以外の感覚を葉月へともたらそうとしていた。全身へ回り始めた酒気が、無垢な少女の身体から余計な力を奪い、それが結果として彼女から苦痛を奪っていったのだ。

「おいおい、随分と声が甘くなってきたじゃねえか。ひよっとして葉月お嬢様は俺に胸を

揉まれて感じちまったのか？」

「はあつ、ああつ、ば、馬鹿な事……言わないでください……誰が……貴方の手……んっ、なんかで……」

痛みが奪われる事は潔癖な令嬢にとっては幸いな事でも何でもない。こんな下衆な男の手で触れられても苦痛ならば耐えられる。だが快樂など感じてしまえば……。

だが、酔いで麻痺した意識は怒りや屈辱を薄め、葉月をおおらかな気分へと変えてしまう。気がつけば男の手を振り払う事も忘れ、為すがままにその身体を弄ばれていた。

「ふふふふ、ほおら、もつと呑めよ……」

「あつ、んんっ!! い、いやっ!! も、もうお酒は……んむうっ……の、飲みたく……はあ、ないのに……んんっ!!」

クチュ……ぐちゅ……ちゆるる……。

何度目かの口づけを交わし合い、酒を流し込まれる。更なる強い酒気に意識が呑みこまれ、頭がボウツとなつて、上手く物事を考える事が出来ない。

同時に舌を吸われ、絡められ、口内を好き勝手に舐めまわされながらのディープキスに、おぞましさと屈辱を感じながら、身体は次第に反応を返し始めていた。

「へへへ、気分出してんじゃねえか……ほおら、乳首が硬くなつて来たぜえ？」

「んんっ!! そ、そんな……はあ、ちがつ、あうっ!! 違います……」

男の指摘通り、まだ若い葉月の肉体は外部からの刺激に対し、酔いも手伝って素直に反応して始めている。それは快樂への反応と言うよりは肉体的な反射反応なのだが、葉月にも男にもそこまで考察する余裕はなかった。

「エロイ胸しやがって、そうやって女は男を喜ばせてりやいいんだよ!!」

「ああうっ!! 痛ッ!! そ、そんな侮辱、許しませ、くううっ!!」

驚掴みにする様に葉月の豊かな双丘を嬲り、捏ね回し、苦痛に歪む彼女の美貌を肴に酒をあおる。本来なら一生手が届かないだろう令嬢の乳房を嬲りモノに出来る。その昂奮が、男達の獣性を更に掻きたてていた。

(くう、こんな男達相手に、好き勝手させてしまうなんて……なんて屈辱……でも、でも麗美を見捨てるわけには……はあうっ)

下衆な男の乱暴な愛撫に唇を噛みしめ、心を支配する屈辱も必死に耐え忍ぶ。だが散々に吞まされた酒が全身に回ると頬が赤らみ、動悸は激しく、呼吸も荒く乱れていった。

飽きる事を知らない愛撫の前に、乳房自体が熱を持った様に熱く疼き、乳首が痛い程に屹立していくのが判る。

「はあ……はあ……あつ、ああつ……も、もうやめ……あうっ!! こ、これ以上は……はあ、胸が……ああうっ!!」

何よりも酔いによつて霞んでしまった意思が定まらない。血流は激しさを増して、体温

はほとんどん高まり、それとは逆に抵抗の意思が弱まっていく。

「ちゅ……んんちゅ……はあ、どうした？ 目がトロンとして来たぜ？ 俺にエロイオッパイ揉まれて、たまになくなっちゃまったか？」

「んんっ!! やあっ!! んちゅ……くうっ、違っ、はあ、違います……んんっ!! も、もうお酒はやめ……ちゅんんっ!!」

もう何度目だろう？ 胃の中に注がれた酒はかなりの量になり、軽い酩酊状態になった少女の足元がふらつくのをリーダーの男は抱きとめる。その細身の体は既にかなり熱く、酒臭い吐息からも彼女が酒気に溺れ始めてるのは明らかだった。

「はあ……はあ……身体が……熱い……胸がドキドキ……して……アウツ!! こ、こんな……はあ……こんな事って……」

「お嬢様って気取っていったってそんなもんさ。ほおら、もう濡れてるんじゃねえか？」
クチュ……ッ!!

「ああうっ!! そ、そこはあっ!？」

丈の長い純白のスカートの上から男の空いた方の手が、葉月の大事な部分を押さえつける。落雷に打たれた様に細い腰が跳ねあがり、同時にソコから響いた湿った音に、男達が歓声を上げた。

「へへへへ、聞いたかよ？ やっぱり葉月お嬢様は、俺のキスにアソコ濡らしてメロメロ

だつてよ」

「はあ、ぬ、濡らすつて……ああ……いやあ、そ、そんな事、あるわけが……ううんっ!!
だめえ……そこ、そこ触らないでっ、くうんっ!!」

クチュ……クチュ……クチュ……ッ!!

不躰な男が指を動かす度に響く湿った水音と、下半身から流れる電流の様な快感に葉月は堪らない羞恥と屈辱を刺激される。酒精に狂わされた葉月の肉体は、彼女の意思を無視して生理的な反応を優先させる。

もしも彼女が酔つてさえいなければこの程度 of 感覚は彼女の強い意志がはねのけただろう。だが慣れない強い酒に酔わされ、初めての性的感覚に翻弄される葉月には抵抗する術がない。

「ほおら、遠慮するなよお。もつと感じちまえ。これから俺達はお前にいっぱい御馳走になるんだからよ? ちゆる……ちゆ……」

「あむつちゆつ、はあ、もう、あああつ!! だめつ!! 胸も、ああ、アソコも……も、もう触らないで……ううんっ!! き、キスもいやなのに……はんっ!!」

ドロドロに酩酊した意識にピンクの霞みがかかる。胸を揉まれる度に熱くなった乳肉が疼き、アソコをスカートの上から押されるだけで、腰の深い所で火花が飛び散った。

高鳴る鼓動に合わせて酒精は全身を駆け巡り、暴走する葉月の感覚が性的な快感を増長

させる。どんどん身体が言う事を聞かなくなっていく。この見知らぬ感覚に溺れていきたくなる。

（だめ……こんな男達に……良い様にされて……こんな事で屈するわけには……私は……私は……負けるものですか……）

それでも心だけはまだ屈してなるものかと不埒な男に対して牙を向く。潤んだ瞳に必死に力を込め、喘ぐ唇を噛みしめてリーダーを睨みつける。

「気の強い女だぜ……けどそんな女もそそるね……くくく……」

「はあ、はっ、はっ、貴方に褒められても……嬉しくも、何とも……ああ、ありません!! ……くっ!!」

「いいね。いいねえ、さて何処までその強気がもつかねえ? ほらよっ!!」

「あっ、ぐううっ!!」

力任せに右の乳房を握り締められ、葉月がその美貌を苦痛に歪める。己の意に沿わない女性を力ずくで従わせる事に、何の良心の呵責も覚えてない最低の男達。そして、そんな奴らに身を任せるしかない屈辱が、痛みなどより強烈に彼女を責め苛む。

クチュ、クチュクチュ……ッ、クチュクチュ……。

けれど酒の回った身体はいよいよ外部からの刺激に対して敏感になり、内側から炎で炙られるかの様な熱感が葉月の若い肉体を支配していた。清楚な下着はしつとりと濡れて淫

猥な香りを放ち、胸の頂ではすっかり硬くなった乳首がその存在を誇示している。

「ほおら、認めちまいな。お前の身体はもう俺のテクニクにメロメロなのさ……」

「んんっ、あああつ!! そ、そんな事ない……あ、ああつ!! やあつ、も、もうそこだめえ……あうっ!!」

ビクビクと身を震わせる令嬢の身体を抱きしめ、その耳朶に舌を這わせながら、陵辱者は耳元に嫌らしく囁いた。その言葉が潔癖な少女の心を更に深く抉ると知って、その嗜虐的な愉悅に酔い痴れる。

力強くその美しい乳房が揉みこまれ、女の聖域を衣服の上から刺激されまくった。熱い感覚が腰の奥で弾け、胸の芯を焦がす熱と、乳首からは突き抜ける鋭い電流が何度も走り抜ける。

「そろそろ準備も良いだろう? お前の身体をたっぷりと味わわせてもらうぜ?」

葉月の身体をテーブルの上に仰向けに横たえ、両脚を抱えた男が上から覗き込みながら不敵に笑う。

「はあ……はあ……くう……い、いや……」

すっかり息が上がってしまった葉月は、何とか逃れようと足掻くが、別の男に手錠で拘束された手首を押さえつけられ身動きが出来ない。既に酔いは全身に回っていて、赤らんだ頬と乱れた制服が酷く煽情的だ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>